

# 大阪大学工学部の歴史



随 筆

大 島 巧\*

History of Faculty of Engineering-Osaka University

Key Words : Osaka University, History of Faculty of Engineering

## 1. はじめに

大阪大学を定年退職する数年前から一年生を対象としたオムニバス講義「大阪大学の歴史」の（工学部編）を担当することになった。この新設授業の目的は、入学後間もない新入生に各学部の誕生から現在までの発展の歴史を紹介し、大阪大学の学生としてのアイデンティティーを早く持ってもらうことにある。講義後、学生に書いてもらった感想文を読むと、工学部の全体像が分かりその規模の大きさに驚いたという意見が多かった。さて、四月開講に向け数か月前から講義の準備を始めたが、私自身、戦前の工学部の歴史については全く知らず、昭和42年に入学試験を受けた手狭な東野田の建物群が脳裏に浮かぶのみであった。応用化学科入学後、教養課程の一年半は豊中の石橋地区で学び、専門課程進学後の講義は移転間もない吹田地区であったので東野田で学んだ記憶はない。本稿では、上記講義のため準備した資料から工学部の創設期から吹田移転までの期間に限定し簡単に記したい。

## 2. 大阪工業学校創立から大阪工業大学まで (1896～1933)

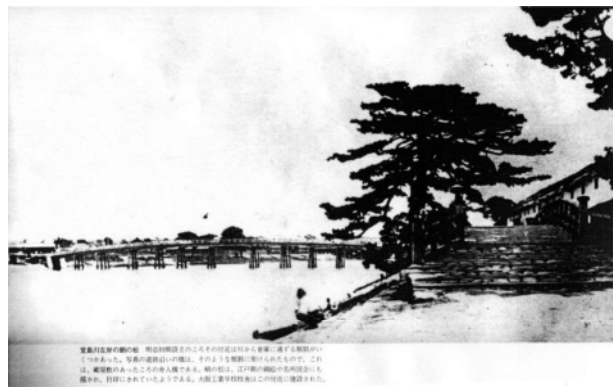
工学部のルーツは、明治29年(1896)、大阪市北区玉江町に「大阪工業学校」が創設されたことに遡る(図1)。今から120年ほど前です。古地図を見



図1 大阪工業学校

ると、現在の中之島5丁目にあたり、堂島川に架かる玉江橋の南詰めでリーガロイヤルホテル東側の一帯である。江戸時代には高松藩の蔵屋敷があったところで、現在、蔵屋敷跡の石碑に当時を偲ぶことができる。

なお、玉江橋の北詰には、豊前中津藩蔵屋敷で生まれた福澤諭吉の生誕跡の記念碑があります。また、ひとつ上流の田蓑橋とのほぼ中間には大阪大学中之島センターが建っているが、もとは久留米藩蔵屋敷があったところで、古い写真を見ると、この辺りの堂島川左岸には、白壁土蔵群とともに浪花名所として浮世絵にも描かれた「蛸の松」が写っている(図2)。

図2 堂島川左岸の有名な「蛸の松」  
- 大阪大学中之島センターがある付近

\* Takumi OSHIMA

1948年4月生  
大阪大学 工学部 応用化学科  
(1971年)現在、大阪大学名誉教授  
工学博士 有機化学

TEL : 072-893-6376

E-mail : to\_ohshima@dsk.zaq.ne.jp

江戸時代は、大坂は諸国の米をはじめとする物産の流通の中心であった。明治になると、商業のほか、紡績、造船などの工業においても急速な発展をとげつつあった大阪は、中堅技術者の養成に迫られ官民あげて工業学校の設立を急務としていた。同様な事情は東京にもあった。東京では、大阪に先んじて明治14年(1881)、現場の技術者および指導者を養成するため東京職工学校が浅草蔵前に設立された。その後、職工という名前が不評で1890年「東京工業学校」、1901年「東京高等工業学校」と改称が行われ、関東大震災(1923)の後に大岡山に移転し(1924)、さらに、1929年(昭和4)「東京工業大学」となっている。この東京職工学校の設立とその後の発展が、大阪における工業学校創設のモデルになったことは想像に難くない。

明治26年(1893)、大阪市は創設概算費10万円のうち半額の5万円を国に寄付することを決め、文部大臣に建議した。翌1894年、文部省はその必要を認め、予算を帝国議会に提出したが決議に至らず、1895、1896両年にわたる継続費として要求した。

その結果、1896年5月、伊藤博文内閣の閣議決定によって、ようやく文部省直轄の学校として官立「大阪工業学校」が設立された。大阪市北区玉江町に伊藤新六郎(東京工業学校の校長でもある)を初代校長として、10月から授業が開始された。ちなみに、本校の目的は「上等職工および職工長を養成する所」とされており、組織は機械工芸部(機械科)と化学工芸部(応用化学科、染色科、窯業科、醸造科、冶金科)の2つの工芸部から成り立っていた。1897年5月の教官は、教授3名、助教授5名、嘱託教員2名で、第一回の学生募集は機械工芸部30名、化学工芸部30名で小規模なスタートであった。入学資格は14歳から25歳までの高等小学校卒業以上の学力を有する者とされ、修業年限は4年であった。1899年6月、本校の目的は「工業に従事すべき者を養成する所」と改められ、修業年限3年、入学資格も中学卒業程度とやや厳しくなった。1900年には、新たに造船部(船体科、機関科)が加わった。

設立5年後の1901年5月に大阪工業学校は、より専門性を高めるため「大阪高等工業学校」と改称され、板金、木型、製缶の各製作工場が落成し、実習機械も当時最新鋭のものが設置された。2年後の1903年に、大阪の工業的発展を象徴するものとし

て天王寺で「第5回内国勸業博覧会」が開催され400万余の入場者で賑わった。今の天王寺公園はその跡地の一部である。

1906年は、創立10周年に当たり、その記念式典(5月18日)が盛大に行われ、構内を一般開放し、機械、応化、染色、窯業、醸造、冶金、造船、船用機関の各科は実物や模型の展示を行い社会との交流を深めた。この頃は、日露戦争(1904-5)の後で、国際的地位も次第に評価されるようになり、国力増強の気運が盛り上がった。特に、関西を中心とする紡績業はこの頃から輸出を主とするようになり、当時、大阪は英国の紡績業が盛んな土地に因んで「東洋のマンチェスター」とよばれていた。

1922年(大正11)、大阪高等工業学校は北区玉江町から大阪市都島区東野田に移転した(図3)。この間、大阪高等工業学校は大学昇格運動を始めており1919年(大正8)、諸般の事情で延期に延期を重ねていたが、1927年(昭和2)に工業大学創立委員会が持たれ、1929年に「大阪工業大学」への昇格が、運動開始以来ほぼ10年の歳月を経てやっと実現することとなった(図4)。



図3 東野田に移転した大阪高等工業学校(大正末期)



図4 大阪工業大学に昇格(昭和4)

### 3. 大阪帝国大学創設から終戦まで (1931～1945)

大阪に帝国大学を設置しようという空気は大正初期からあったが、関西にはすでに京都帝国大学があり、当時の政府の帝大の地域配分計画から、京都のとなりの大阪に帝国大学を設けることには問題があったようである。しかし、1919年(大正8)には全国初の公立大学として大阪府立医科大学が、1928年(昭和3)には、これまた全国に先駆けて大阪市独自による大阪市立商科大学が設置され、また、前述のように1929年には、大阪高等工業学校が日本最初の工業大学として、大阪工業大学に昇格している。このような事情に鑑みて、大阪にあるこれら3大学の力を統合して総合帝国大学を設立しようという気運は次第に高まっていった。

「大阪帝国大学」の創設は、その内容、財政などから難航を極めたが、1931年に衆議院、貴族院をやっとのことで通過、4月大阪帝国大学設立案が可決された。内容は、医、工、理の3学部よりなり、医学部は府立大阪医科大学を国に移し1931年開設、理学部も1931年設置、工学部は、官立大阪工業大学を移し2年遅れの1933年開設というものであった。

大阪工業大学は1986年設立の官立大阪工業学校をルーツにもつ伝統ある大学でありながら大阪帝国大学創立の中心となり得なかった。そこで、教授会、学生ともども、1931年2月頃から帝大工学部になるよう猛運動を開始し、初代堤正義学長はじめ有力者、学生が上京陳情した。また、大阪工業倶楽部(現大阪大学工業会)、教授会、学生会も強力に編入運動を展開した。当初、文部省は、工学部も医・理学部と同時に開設したい意向であったにもかかわらず、大阪工業大学の創立委員であった功労者の思い入れで1931年編入案は見送られてしまい、翌年



図5 工学部第一期生

開設も実現せず、結局2年遅れの1933年に大阪帝国大学に編入、工学部開設という結果になった(図5)。

1945年、工学部は、大阪工廠に近かったため空襲を受けて本館ならびに実験室の大半を失い、キャンパスから大阪城天守閣が遠望できた。戦災のため、翌年に枚方市にあった陸軍造兵廠跡(現在の小松製作所大阪工場)に工学部枚方学舎が開設された。

### 4. 新制大阪大学発足から吹田移転 (1947～1970)

1947年(昭和22年)、大阪帝国大学は大阪大学と改称され、49年に、新制4年生大学が発足した。しかし、再建された東野田地区は限られた面積に多くの建物があり、今後の発展を考えると手狭であった。高度経済成長により、EXPO 70が大阪で開催されることが決まり、その用地として千里丘陵が大規模に開発されることになった。工学部は、1968年に吹田地区への移転を開始し、1970年に移転が完了した。

新天地の吹田での工学部拡充期および大学院重点化に関連した学科・専攻の改組、再編については非常に複雑になるので本稿では記さないが、紅葉の素晴らしい秋の工学部キャンパスの写真を示す(図6)。興味のある方は「工学部ホームページの歴史資料館」を参照されたい。



図6 工学部吹田キャンパス

また、東野田で学生時代を過ごされた方にとって思い出深い旧工学部跡地の現在の姿を写真で示したい。元正門から入った部分は、大阪市立東高校に生まれ変わっており(図7)、京橋駅に最も近かった通用門から入った部分はNTTの研修所として利用

されている (図8)。最近さらに高層ビルが増設されている様子が環状線の車窓から見て取れる。



図7 工学部の元正門 (現在大阪市立東高校正門)  
H23.6.6



図8 工学部の元通用門 (現在 NTT 西日本研修所の正門)  
H23.6.6

## 5. むすび —長春富貴—

私は、修士課程を出てから2年間の企業生活と1年余のドイツ留学を除いて大阪大学で永年お世話になりました。特に、学究生活の基礎を培った工学部には特別の想いがあり、そのことを感謝の気持ちを込めて記したいと思います。

私は、寝屋川市の淀川に近いところで生まれたので、水泳、魚採りと川は少年時代の楽しい遊び場でした。この淀川、鉄道が開通するまで京と大坂を結ぶ大動脈として重要な役割を果たし歴史にもたびたび登場してきました。江戸時代、その堤防は京街道として、また、30石舟が京伏見と大坂八軒家浜の間を行き交い多くの旅人や物資を運んでいました。街道沿の伏見、淀、枚方、守口には宿場が開かれ、特に、枚方には舟溜りがあり小船を出して旅人に酒や食物を「くらわんか (食らわんか)」とって供していた。その時の器が、何らかの理由で川に落ち、数キロ下流で渇水期の川で見つかることがある。これを、売り子の掛け声に因んで「くらわんか茶碗」と称して好事家はその素朴な絵柄、形に魅せられ淀川の河床を探しているのをよく見かけた。現在、くらわんか茶碗は歴史資料として市の博物館にも収蔵されている。昔、私も犬の散歩中、幸運にも全く傷のない完品を見つけ、母に見せたところ糸底の「長春富貴」という銘を見て、きっといいことがあると言われた記憶があります。前置きが長くなりましたが、工学部は、この銘のように今後も発展することを願ひむすびとさせていただきます。

